

平成28年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 I

新たなスポーツ価値意識の 多面的な評価指標の開発

— 第3報 —

公益財団法人 日本体育協会
スポーツ医・科学専門委員会

新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発

－ 第3報 －

- 研究班長** 木村 和彦（早稲田大学）
- 研究班員** 菊 幸一（筑波大学），作野 誠一（早稲田大学），霜島 広樹（早稲田大学），
中西 純司（立命館大学），藤田 雅文（鳴門教育大学），松岡 宏高（早稲田大学），
森丘 保典（日本大学）
- 協力班員** 足立名津美（早稲田大学大学院），醍醐 笑部（早稲田大学スポーツ科学研究センター），
茂木 宏子（筑波大学大学院），望月 拓実（早稲田大学スポーツ科学研究センター），
本間 崇教（早稲田大学大学院）
- 日本体育協会スポーツ科学研究室**
鈴木なつ未，石塚 創也

目 次

はじめに	木村 和彦	3
第1章 「するスポーツ」の価値意識評価尺度の開発： 個人的価値意識と社会的価値意識に焦点をあてて	霜島 広樹ほか	8
第2章 みるスポーツの価値意識に関する研究	本間 崇教ほか	24
第3章 ささえるスポーツの価値意識に関する研究	望月 拓実ほか	33
第4章 3年間のまとめと今後の研究課題： 「する」スポーツ価値意識研究の展望と課題	中西 純司	40
第5章 3年間のまとめと今後の研究課題： 「みる」スポーツ価値意識研究の課題と展望	菊 幸一	48
第6章 ささえるスポーツの価値意識に関する研究のまとめと今後の研究課題	藤田 雅文	59
ま と め	木村 和彦	61
資 料		63

はじめに

木村 和彦¹⁾

1. 研究目的

これまでのスポーツの価値（価値観、価値意識）に関する研究が対象としてきたスポーツは「する」スポーツや一部の競技者に限定的であり、スポーツ基本法をはじめとする新たなスポーツ諸政策に謳われているスポーツの価値とは必ずしも一致していないとの問題意識から、スポーツの価値（価値意識）に関する包括的なレビュー、近年のスポーツ政策やスポーツ教育等におけるスポーツの価値の概念的検討（1年目）に基づき、理論的な研究を継続しながら、実証的なレベルで研究を促進に向けて、スポーツ価値意識の多面的な評価指標を開発するための予備調査を実施した（2年目）。最終3年目（平成28年度）は、「する」スポーツと「支える」スポーツの価値意識に関する追加的な予備調査を実施するとともに、「みる」スポーツを加えた3つの参与形態別に、スポーツ価値意識評価尺度を開発するために本調査を実施した。同時に、スポーツ価値意識の全体像を可視化するためにチャート図で示した。さらにスポーツ価値意識のスポーツ行動予測因としての有用性をさぐるために、参与形態別に、スポーツ価値意識を独立変数として、スポーツへの興味、スポーツへの関与、QOL評価等を従属変数とする分析を行っ

た。

その結果、「する」スポーツに関しては、個人的価値（5因子、18項目）、社会的価値（4因子、17項目）、みるスポーツに関しては、個人的価値（5因子、12項目）、社会的価値（1因子、6項目）、支えるスポーツに関しては、7因子、30項目からなるスポーツ価値意識評価尺度（通常版）を開発することができた。また、スポーツ政策や行政評価の実践に使いやすくするために、因子の数を変えずに調査項目数を約半分にするという方針のもとに、因子負荷量を基準にして調査項目数を少なくしたスポーツ価値意識評価尺度（簡易版）を開発した。

2. 第3報の構成

第1章（霜島・木村論文）は、「する」スポーツに関するスポーツ価値意識評価尺度の開発結果を報告するとともに、価値意識を独立変数、「スポーツへの興味」、「スポーツへの関与強化」、「スポーツ実施意欲」および「QOL評価」を従属変数とした重回帰分析の結果を報告している。その結果、図1のように、多くの個人的な価値が、スポーツへの興味、関与、実施意欲やQOLに関係していること、社会的価値では、社会・生活向上、経済、国際、教育との関係がみられ

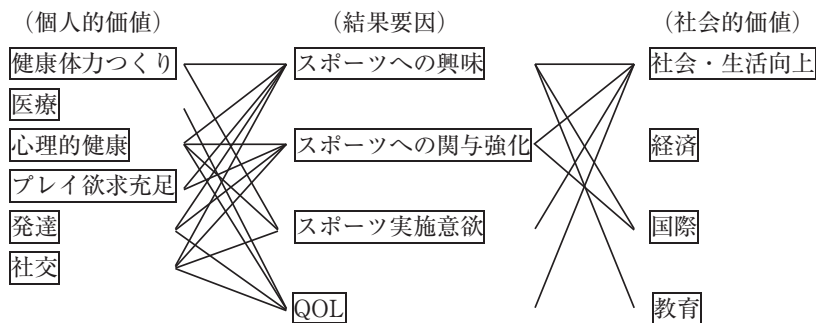


図1 「する」スポーツ価値意識の分析結果

1) 早稲田大学

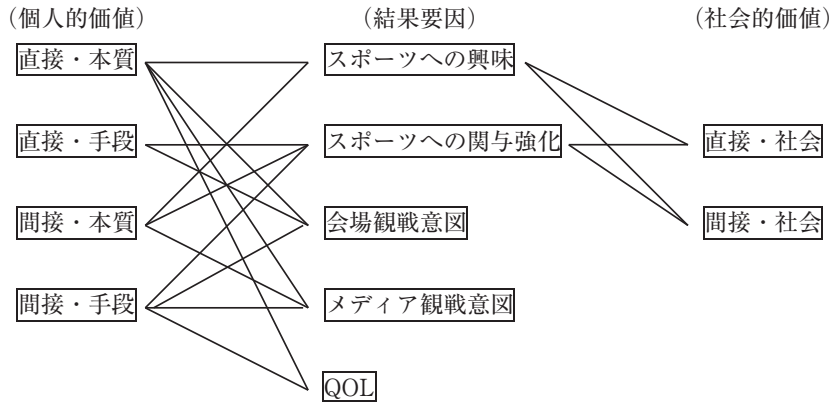


図2 「みる」スポーツ価値意識の分析結果

※社会的価値と会場観戦意図・QOLの関係は分析していない

(個人的価値) (社会的価値) 集团的アイデンティティ

本質的価値 (代理達成, ドラマ, パフォーマンス)
 手段的価値 (社交, 逃避)
 直接: 会場での直接観戦
 間接: メディアを通じた間接観戦

た。しかし「する」スポーツの個人的価値の中で、本質的価値を位置づけられるプレイ欲求充足価値がスポーツ実施意欲やQOL評価に影響を与えていないことが明らかになった。「する」スポーツの本質的価値と想定される価値意識が、スポーツ実施意欲やQOL評価と関係がないということをどのように理解すればよいのか。中西(第4章)が指摘するように、狭義のスポーツと健康のための運動の違いなのか、あるいは菊(第5章)が指摘するように、日本人のスポーツ価値意識の形成過程における歴史社会的な特性なのか、スポーツ価値意識研究の新たな研究課題として注目すべき結果である。

第2章(本間・松岡論文)は、「みる」スポーツに関する価値意識評価尺度の開発結果を報告するとともに、価値意識を独立変数、「スポーツへの興味」、「スポーツへの関与強化」、「スポーツ実践意欲」、「会場観戦意図」、「メディア観戦意図」および「QOL評価」を従属変数とした重回帰分析の結果を報告している。

その結果、図2に示すように、直接観戦のみならず、メディアを通じた間接観戦に関するスポー

ツ価値意識(個人的価値)がスポーツへの興味、スポーツへの関与強化やQOL評価の影響要因になっていることが明らかとなった。また「みる」スポーツの社会的価値意識は、直接・間接観戦のどちらもスポーツへの興味や関与強化へ影響を与える可能性があることが示唆された。

第3章(望月・作野論文)は、「支える」スポーツに関するスポーツ価値意識評価尺度の開発結果を報告するとともに、価値意識を独立変数、「スポーツへの興味」、「スポーツへの関与強化」、「スポーツ実施意欲」、「スポーツボランティア実施意欲」および「QOL評価」を従属変数とした重回帰分析の結果を報告している。その結果、自己改革、地域奉仕、能力経験活用の価値意識が、すべての要因に影響を与える可能性が明らかとなった。とりわけ、この3つの価値意識の高い人ほど、QOL評価が高くなる可能性があるという結果は、スポーツボランティアを活用するスポーツ団体が、スポーツボランティアに対する非経済的報酬を考えるというマネジメント課題に対して有用な情報を与えてくれる。

第5章(中西論文)は、「する」スポーツの価

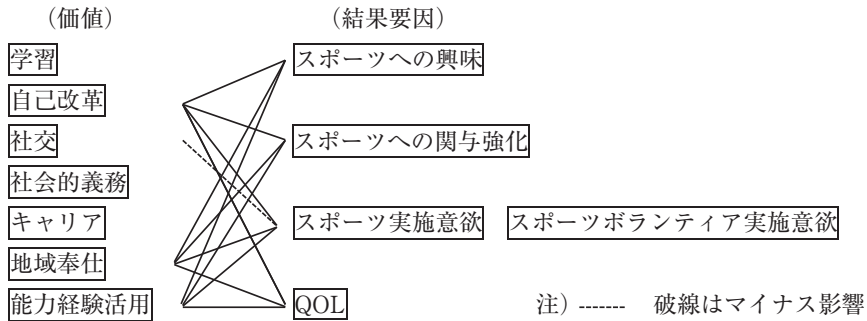


図3 「支える」スポーツ価値意識の分析結果

価値意識に関する3年間の研究を総括し、今後の展望と課題を報告している。今後の研究課題として、以下の4点を指摘する。

①スポーツ概念の定義の問題：スポーツ価値意識を研究する場合、その前提は「スポーツとは何か」といったスポーツ概念を明確に捉えておく必要がある。なぜならば、野球やサッカー、バレーボールなどの「プレイ欲求の充足」を求めて自発的に行われる運動、いわゆる「スポーツ」をしている人と、軽い体操や散歩・ウォーキング、トレーニングやフィットネス、転倒予防運動などの人間生活上のある種の「必要充足」のために行われる運動（健康・体力づくり運動）をしている人とは、運動やスポーツに対する価値意識が大きく異なることが容易に予測できるからである。（中西）

②すでに運動・スポーツを実践している人びとの価値意識研究：第3報（第1章）では、「スポーツへの関与」という、スポーツをする・みる・ささえるといった関わりの強化の合計点を従属変数としたが、スポーツをする・みる・ささえるといった多様な関わり方が日常生活にどの程度定着されているかを意味する「スポーツ生活」の現状（「する・みる・ささえる」という豊かなスポーツ生活、「する・みる」「する・ささえる」「みる・ささえる」という中程度のスポーツ生活、「する」のみという運動生活、「みる」のみや「ささえる」のみのスポーツ生活など）によってスポーツ価値意識にどのような違いが見られるのかについてのスポーツ生活分析も必要であると思われる。（中西）

③「ライフステージ・スポーツ論」に基づく「する」スポーツ価値意識研究の展開：「ライフステー

ジに応じたスポーツ関与（する・みる・ささえる）」を促進していくためには、ライフステージ別（幼児期－小・中・高校期－大学等・就職期－結婚・出産期－高齢期など）に「する」スポーツ価値意識の違いを詳細に分析していくことが喫緊の課題であると考えられる。（中西）

④スポーツの本質的価値研究：スポーツのコア・バリューとは何か。①第3報（第1章）の研究結果では、「プレイ欲求充足」という本質的価値（「する」スポーツのコア・バリューと想定していたはずが）がスポーツ実施意欲やQOLには影響を及ぼさないということであった。現代社会においてはもはや、スポーツには「プレイ欲求充足」以上のコア・バリューがあるのか、それともスポーツの外的価値の方が日本人にとっては有効なのか、こうした研究課題への挑戦が求められている（中西）。

第5章（菊論文）は、「みる」スポーツの価値意識に関する3年間の研究を総括し、今後の展望と課題を報告している。現代社会に求められる「みる」スポーツの価値への探求は、個人的なレベルの心理的効用がどのような文化的価値や社会的価値に洗練され、それが発育発達期におけるどのような教育的価値によって形成される可能性が明らかになることであると指摘した上で、まずは、本研究の目的であった「みる」スポーツ価値意識評価尺度に関する一般化の第1段階は終了たと評価している。今後の研究課題と展望として、以下の2点を指摘している。

①「みる」スポーツの個人的価値尺度と社会的価値尺度の関連性を視野に入れた多面的な因子構

成や尺度項目の開発：「みる」スポーツの価値意識研究の目的の1つは、その面白さや楽しさといったところから始まって、それがどのような望ましい社会的価値の方向性につながっていくのかを明らかにしようとする問題意識が重要だと考えるからである。この問題意識は、冒頭で述べた社会にとってむしろ脅威にもなりかねない「みる」スポーツの価値を生み出す危険性を踏まえて、その経済的価値や政治的価値等といった外在的・手段的価値のあり様を考えていくことにつながっている（菊）。

②日本人における本質的価値と手段的価値の形成：果たして日本人にとって手段的価値と考える「価値」と同様な「価値」として受けとめられているのかどうか、あるいはそのような効用や影響力を持つものとして血肉化＝エートス化されている（されてきた）のかどうか、ということがあげられるのではないだろうか。英語で「本質的価値」とはintrinsic value、すなわち「内在化」されエートス化された価値（いわば、手段的・道具的な価値基準からみれば価値としてさえ認識されないような「無価値」な価値）であり、これはあらゆる外在化された価値の原点となっているという意味である（菊）。最後に、「みる」スポーツの価値意識尺度を構成する目的は、スポーツ文化全体を考える上でも、また当該社会とスポーツ文化のあり様を相互の問題として考えていく上でも、極めて重要な意義を有していることが理解できるとして、3年間の研究を通じて、あらためてスポーツ価値意識評価尺度の開発の意義を再確認している。

第6章（藤田論文）は、「支える」スポーツの価値意識に関する3年間の研究を総括し、今後の展望と課題を報告している。3カ年を通して、スポーツを「ささえる」人々の価値意識を調査研究した結果、「学習」「自己改革」「社交」「社会的義務」「キャリア」「地域奉仕」「能力・経験活用」と命名された7因子30項目が精査され、人生の幸福感を尺度とする「クオリティ・オブ・ライフ」（quality of life, QOL）との関係では、「自己改革」が最も強い規定力を有しており、「地域奉仕」「能力・経験活用」も有意な規定要因であることが確

認されたと評価している、今後の研究課題としては、以下の2点を指摘している。

①国際大会で活動するボランティアスタッフをいかに確保し、どのようにして適材適所に配置し、どのような研修を行うのか等、ボランティアマネジメントの課題解決に向けての研究。

②非日常的なイベント・ボランティアのみに研究対象を焦点化し、年齢・性別・資質の属性によって、ささえるスポーツの価値意識に相違があるのか、彼らが抱く期待に対して、どのような活動を提供すれば「自己変革」をもたらすことができるのかの検討。

まとめ（木村論文）では、第1章から第6章までを概観して、以下の2つの課題を提示した。

①スポーツ価値意識に関する基礎研究の継続
中西（第4章）、菊（第5章）が指摘しているように、「する」「みる」「支える」個別の価値意識評価尺度についてはスタート地点に立つことができたが、個人的価値（individual value）と社会的価値（social value）、本質的価値（intrinsic value）と手段的価値（instrumental value）など、価値意識間の関係とダイナミズムに関する研究を通じて、幅広い調査研究を継続、蓄積していくことによって、スポーツ価値意識の構造や具体的な評価尺度を洗練していく必要がある。

また今回の研究では、当初想定していたスポーツ文化の制度的価値（institutional value）にアプローチすることはできなかった。ただし「する」や「みる」スポーツの社会的価値意識や「支える」スポーツの価値意識が、わが国のスポーツ制度を構成するスポーツ行政やスポーツ団体（指導者を含む）、学校体育の評価（価値）と大いに関係していることが予想される。今後の研究課題とした。

②スポーツ価値意識評価尺度を援用した応用研究

一つは、スポーツの価値意識に関する国際比較研究である、スポーツ価値意識は、人々のスポーツ参与（する、みる、支える等）を方向づけるものである、各国のスポーツ参与の実態を説明する要因をスポーツ価値意識から解明する、それらが各国のスポーツに係わる制度や教育制度とどのよ

別表 スポーツ価値意識評価尺度（通常版）の構成

参与形態 価値レベル	するスポーツ N = 1030		みるスポーツ N = 1030		支えるスポーツ N = 618 (スポーツボランティア経験者)
	個人的価値	社会的価値	個人的価値	社会的価値	
本質的価値	1 因子 ・プレイ欲求充足 (3項目)	4 因子 ・社会生活向上 ・経済 ・国際 ・教育 (17項目)	3 因子 ・代理達成 ・ドラマ ・パフォーマンス (8項目)	1 因子 ・集団的アイデンティティ (6項目)	7 因子 ・学習 ・自己改革 ・社交 ・社会的義務 ・キャリア ・地域奉仕 ・能力・経験活用 (30項目)
手段的価値	4 因子 ・健康体力づくり ・医療 ・心理的健康 ・発達 ・社交 (15項目)		2 因子 ・社交 ・逃避 (4項目)		

うに関係しているのかを明らかにすることは、わが国におけるこれからのスポーツ制度や教育制度のあり様を考える上での重要な情報を提供してくれるだろう。

二つ目は、オリンピックなどメガ・スポーツイベントのスポーツ価値意識への影響研究である。わが国でも、2019、2020と国際的なメガ・スポーツイベントの開催が予定されている。そこでは、施設建設やインフラ整備、開催運営などに巨額の公費が投入されることになる。とりわけ低い経済成長、人口減少下にあるわが国では、公費投入に見合った成果（効率）が厳しく問われることになる。その場合、施設やインフラなどのハードだけ

でなく、ソフト・レガシーとしてのスポーツ文化の発展、その基盤となるスポーツ価値意識の高揚への影響を評価することはイベントの成果として（主催者の納税者に対する説明責任として）重要になると考える。

最後に、資料1として「スポーツ価値意識評価尺度（通常版）」と資料2として「スポーツ価値意識評価尺度（簡易版）」を掲載した。簡易版は、スポーツ政策や行政評価等の実践の場において、より使いやすくするために、通常版の約半分の調査項目数にするという方針のもと、因子数を変えずに因子負荷量を基準として選択した項目から構成されている。